
美髮椿 《サリタ》

さた遊紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美髪椿 《サリタ》

【Nコード】

N4850S

【作者名】

さた遊紀

【あらすじ】

【行商人】の青年と、【積み荷】の少女の旅路。大陸を割る山脈の峠で、【髪を売る】少女に出会う。

季刊誌「月雲」2009年5月号 掲載作品

「本当にいいの？」

戸惑っているような男の問いかけに、毅然と頷く。

「凄く綺麗なのに…もったいない」

正面にうづくまっっている男の連れの少女が、残念そうに眉根を寄せた。彼女の身を震わせるような美しい声音でそんな事を言われると、つついっつい決意が緩みそうになったが、懸命に跳ね除けてもう一度頷いた。

「切れるだけ切って持って行って欲しいんです。出来るだけお金に変えて下さい」

アイリヤ峠という頂を持つ山の中腹より少し上。痩せた高地に暮らす若い娘は、ときどきこうして『髪を売る』。

今年是不作の年だったから、仕方の無いことなのだ。こうして綺麗に手入れをするのも、いつでもお金に変えられるようにしておくためなのだし。

身を売ったりしなくて良い分、自分はまだ恵まれている。

「神の御前で女の子の髪を切ることになるなんて」

苦笑まじりに呟いた男を振り返ると、哀しそうな目をして微笑んでいた。

何で彼がそんな顔をするのだろう。

街のお金持ちの間では、入れ髪や付け毛が流行っていると聞いた。自惚れになってしまいかもしれないが、これだけ質の良い髪を売ればそれはそれはいい儲けになるだろう。

だから定期的にこの村にやって来るような商人もいるというのに。「そんなこと気にしなくてもいいんじゃないかな、キギス。アレの

真ん前で一回男をぶん殴ってるんだから、今更何しようとか大して評価は変わらないと思う」

言葉遣いはとても優雅とは言い難いのに、少女が喋ると聞き惚れてしまいそうになる。

それを本人も気にしているのか、いつも極力音を抑えようとしていたような変な喋り方をするのだが、自分は山育ちで耳はいいのであんまり効果はないと思われた。現に自分の耳はしっかり音を拾っている。

「……確かにそうかもしれないけど。 サナギ、せめて『神』って言うてあげなよ。『アレ』じゃさすがに酷いと思う。宗教裁判とかにかけられちゃったらどうするの」

そんな軽口を叩くあたり、彼も信仰はしていないようだ。信心深かそうなことを言うておきながら、なんとまあ。

「……わかった」

素直に頷く少女に頷き返して、男は手に持った小刀を、ようやくと構えてくれた。頭のとっぺんとも言える位置で結った髪に、刃先があたる。でもまだ切れた感触はない。

「……っ」

思わず唇をかみ締めてその時を待っていると、

「もう少し下で、切り終わった後の見映えが悪くならないようにしようっ」

折角構えた小刀を、今度は脇の机に置いてしまって、彼は柔らかく言った。

その気遣いは、普通は嬉しいものだろうけれど、今の自分には必要ない。切った後の見映えがどうかは関係なく、どれだけ切って、どれだけお金に変えられたかが重要なのだ。

「気にしないで、切れるだけ長く切って行って下さい。その後は自分で綺麗に整えるから問題ありません」

「でもそれじゃあ短くなりすぎるじゃないか。…男の子みたいになっってしまう」

「問題ありません」

もの惜しそうに眉根を寄せる彼にスパンツと返して、視線を真っ直ぐ前に保つ。顎を引いて背筋を伸ばし、今度は唇を噛んだりしないよう、ぴったり口を閉じて、じっと待った。

「…諦めるしかないみたいだね、キギス」

そう少女が呟いて、

「…………。そうみたいだね。サナギ第二号って感じた…………」

彼は観念したように、嘆息と共に呟いた。

燭台の灯が、薄く開かれた窓から吹き込む早春の風に揺れる。

日没間際の村の何処かで、羊が鳴いてカクケルいる。

その声はどこか哀しげに響いた。

ザクツ

はらはらと、支えを失った髪が落ちてくる。頭が少し軽くなって、首筋が寒かった。眼前の少女は寂しそうに目を細め、切り取った『先』を持った彼が、背後で小さく息を零した。

良質な品を手に入れられた彼らが、どうしてそんな顔をするのか。でも、彼らがそんな風に惜しんでくれたから、自分は逆にすつきりとした気分でいられるのかもしれないと思う。

「それでいくら貰えますか？」

腰掛けていた椅子から立ち上がって、振り返る。

彼は髪の切れ端を、丁寧に、手際よく束ねて、内側にビロードが貼られた細長い木箱にそっとしまった。

「いくら欲しいの？」

訊ね返してくる彼に、少しムツとして眉を寄せる。

「からかってるんですか？」

「いや？そっじゃない」

柔らかに微笑んで、彼は木箱を優しく撫でた。

「本当にいい品だったから、出し惜しみは出来ないし。商談っていうのは、売る方にだって希望の買取価格を提示する権利があるだろう？」

「こんな田舎の村娘と商談しようって？」

馬鹿げてる。こっちは髪相場だつて知らないのだ。そんな相手と商談なんてできるはずがない。

訝しんで眺めやっても、彼の表情は相変わらずだった。裏表なんてまるでなさそうな、人の良い笑顔。

「……700リグラ」

この前来た商人に髪を売っていた子が貰った代金を思い出して言ってみる。すると彼は目を丸くして、背後の少女も「え……」と驚いたように眩きをもらった。

大きく出すぎてしまっただろうか。

売った長さはあの子より少し短いし、歳も自分の方がいくつも上だ。

だからこんな村娘に商談なんか出来るわけないと言ったのに。「高値を言い過ぎました……ごめんなさい。でも私は相場なんて知らないんです」

溜め息まじりにそう返せば、

「それは……そうだ……」

今まで一度も見せなかった、なんだか少し険しい顔をして彼は小さく呟いた。それきりぴたりと黙ってしまふ。あの穏和で温厚で寛厚そうな人が、だ。

「それは、いつも来る商人たちが買い取っていく値段？」

黙ってしまった彼の代わりに少女が訊ねてきて、何が問題だったのだろうと彼を盗み見ながら頷いた。

「白状すると、本当はわたしよりももう少し長く売った子が貰った代金なんですけど……」

少し欲を出してしまったことが恥ずかしくて、尻すぼみになって

しまったのに、少女はすっかり聞き取って、何故か諦観しているような表情を見せた。

「…そんなもんだよね」

「サナギ…」

その呟き聞き拾ったらしい彼が、優しく少女の名前を呼ぶ。

彼女は少し彼を見つめて、それからこちらに微笑みを向けた。

「キミは運がいい。キギスは商人だけど、商人に向いてないくらいお人好しだから」

なんとも言い難い顔をしている彼などまったくお構い無しにそう言って、短く付け足す。

「そんなに安いわけないよ」

「え…？」

訳がわからず首を傾げると、彼が口を開いた。

「この質でこの長さなら、1000リグラで買い取ったってこつちが儲けすぎる。1500で妥当ってところだと思う」

本気で言っているのだろうか。そんなはずがあるわけない。たかが髪の毛一束が、1000リグラを超えるなんて。

「……………からかってるんですか？」

恐くて、そうであったら良いとまで思ってた責めるように言ったのに、彼らは顔を見合わせて、少女は黙って顔を俯け、彼はゆっくり否定の言葉を紡いだ。

「本当のことだよ」

+

「また私の髪が伸びた頃に買い取りにきて下さい」

御者台に腰掛けたキギスにそう言つと、彼はもの凄く微妙な笑顔をみせた。

「だから、あんまりそういうものは扱いたくないんだけど」

「……何だかんだで根負けするよね」

その隣で、やっぱり声を抑えたサナギが呟く。

「その第一人者が自分だって自覚して、サナギ……」

額に手の甲を押し当てて呻くキギスのようすが可笑しくて、つい
つい笑ってしまった。

それを見て、彼も柔和な笑みを浮かべる。

「この毛皮はアストラカン一級品だったから、機会があればまたいつかね」

「…それは光栄です」

「バイバイ」

手を振るサナギに手を振り返し、動き出した馬車を見送った。

どんとどんと遠ざかる彼らを見送りながら、そういえばキギスは一度も自分の名前を呼んでくれなかったことに気付く。

『サナギ』って呼ぶときは、ことさら優しい声になるのに。

なんだかそれが凄く不満で、

そんな事を思った自分に、少し、
驚いた。

サリタ・了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4850s/>

美髪椿 《サリタ》

2011年4月15日22時10分発行